みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

マダガスカルにおけるサンゴ礁漁業の過去と現在：自律的資源利用の展望

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001805

岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』
国立民族学博物館調査報告　46:345-369(2003)

マダガスカルにおけるサンゴ礁漁業の過去と現在

自律的資源利用の展望

飯田　卓
国立民族学博物館

1 序論
2 調査地：民族集団，自然環境，経済単位
3 調査方法
4 村の地先における日常的な漁業
5 アンザミタルカ島におけるサメ刺網漁
6 ムルンダヴァ市におけるナマコ刺突漁
7 漁家経済のなりたち
8 1970年以降における漁撈活動の発展
9 自律的資源利用にむけて
10 結論

1 序論

小規模漁業の研究においては，伝統的漁業権（Traditional Use Rights in Fisheries，以下「TURF」と略記）が重要なトピックとなってきた。たとえばヨハネスは，自然環境と経済がともに脆弱なオセアニア島嶼域においてこの問題が重要であることを強調している。この地域では，漁場が限られていて生物多様性も高くなく，過度な漁獲圧によって資源枯渇が起こりやすい。おまけに，観光などの主要産業が景気に左右されやすいため，「数千マイル彼方の市場の意思決定が最終的に支配する貨幣経済」のもとでは，資源枯渇が不可避だとさえいえる。こうした状況では，意図的ないし非意図的におこなわれてきた伝統的な「漁場保全」の方策を復活させ，現代的文脈に即するよう調整をはかれば，先住民の資源管理を効果的に奨励することができる（Johannes 1978）。こうした提案は，30年を経た今日においてもなお重要である。

ヨハネスの問題意識を受けて，多くの研究者が世界じゅうのTURFの現状について報告してきた（Ruddle and Akimichi 1984; Cordell 1989; Poggie and Pollnac 1991）。1980年代には，さまざまな研究者が分野を超えて共有資源（common property resources）の問題に取り組むようになり（McCay and Acheson 1987; Berkes 1989），地域開発の専門家のあいだでも地域に基盤をおいた資源管理（community-based resource management）や共同管理（co-management）の考え方が普及するようになった（Acheson 1989; Jentoft 1989; Pinkerton 1989）。その結果，現在では，小規模漁業の発展と資源管理に関する体系的かつ実用的な教科書すら利用できるようになっている（Bunce et al. 2000; Berkes et al. 2001）。

しかし，解決されていない問題も多い。地域に基盤をおいた資源管理や共同管理は，特定の集団が特定の範囲の漁場を利用してきた場合に機能するが，そうした対応関係が成立しない場合，誰がどの資源を利用してよいかが規範として共有されにくいからである（Stern et al. 2002: 462）。そこで，回遊性（migratory）資源をいかに管理するかという問題や（Kishigami in print），移動性の高い（migratory）漁民による定着性資源の利用をいかに管理するかという問題が生じてくる。本論文では後者の問題を扱う。マダガスカル南西部の漁村では，共和国の独立後に「貨幣経済」が浸透した結果，近年では100 km以上はなれた地域まで季節的に出漁するという現象が起こっている。このためTURFは大きく変容することを余儀なくされ，資源量の減少を引き起こしてもいるが，いっぽうで，地元漁民が海域を利用する権利は保証されていない。このため，関連した制度の整備が急務であるようにみえるのだが，そうした措置は，漁民たちが他の地域へ移動するという選択肢を狭めてしまう危険性をもはらんでいる。本論文ではまず，長期間の参与観察にもとづいて，この地域の漁撈活動の現状について記述する。とくに，漁民たちが移動する動機を明らかにするため，漁家経済のなりたちについて詳しく述べる。次に，サンゴ礁環境と漁家経済の相互作用に着目しつつ，この地域における過去数十年の漁業史をたどる。最後に，漁業にまつわる問題に漁民自身が裁量を下すという将来を実現するために，いくつかの提案をおこなう。

2 調査地：民族集団，自然環境，経済単位

ヴェズは，マダガスカル南部および西部の海岸に居住する人びとである。この集団は，ヴェズ自身からはひとつの民族集団と見なされており，近隣の集団もそのように見なしている（Grandidier and Grandidier 1908: 250; Koechlin 1975: 23; Marikandia 2001）。近年は，ヴェズのアイデンティティを民族アイデンティティと見なすことに対して批判的な研究も出ているが，次の事実を認めることに関しては従来の研究と大きく違わない。すなわち，ヴェズのアイデンティティは，魚を捕獲し，食し，売るといういとなみを実践しつつ海辺に居住するなかで，いわばハビトゥスとして身につくという事実である（Astuti 1995a, b）。筆者の経験を思い起こしても，「ヴェズ」という語は漁撈や航海における熟練を示し，漁師や船乗りとしての技能を賞賛するのにも用いられる。こうした事実はすべて，ヴェズの生活において漁撈が重要であったことを示すといってよい。

調査は3つの地点でおこなった。1つはアンパシラヴァ村で，他の2つはアンパシラヴァ村民がキャンプ地として利用していた場所である。後者については後述しよう。アンパシラヴァ村は，行政的に，トゥリアラ州（Toliara）ムルンベ県（Morombe）ベファンデファ郡（Befandefa）に属し，行政的および商業的中心であるムルンベ市から

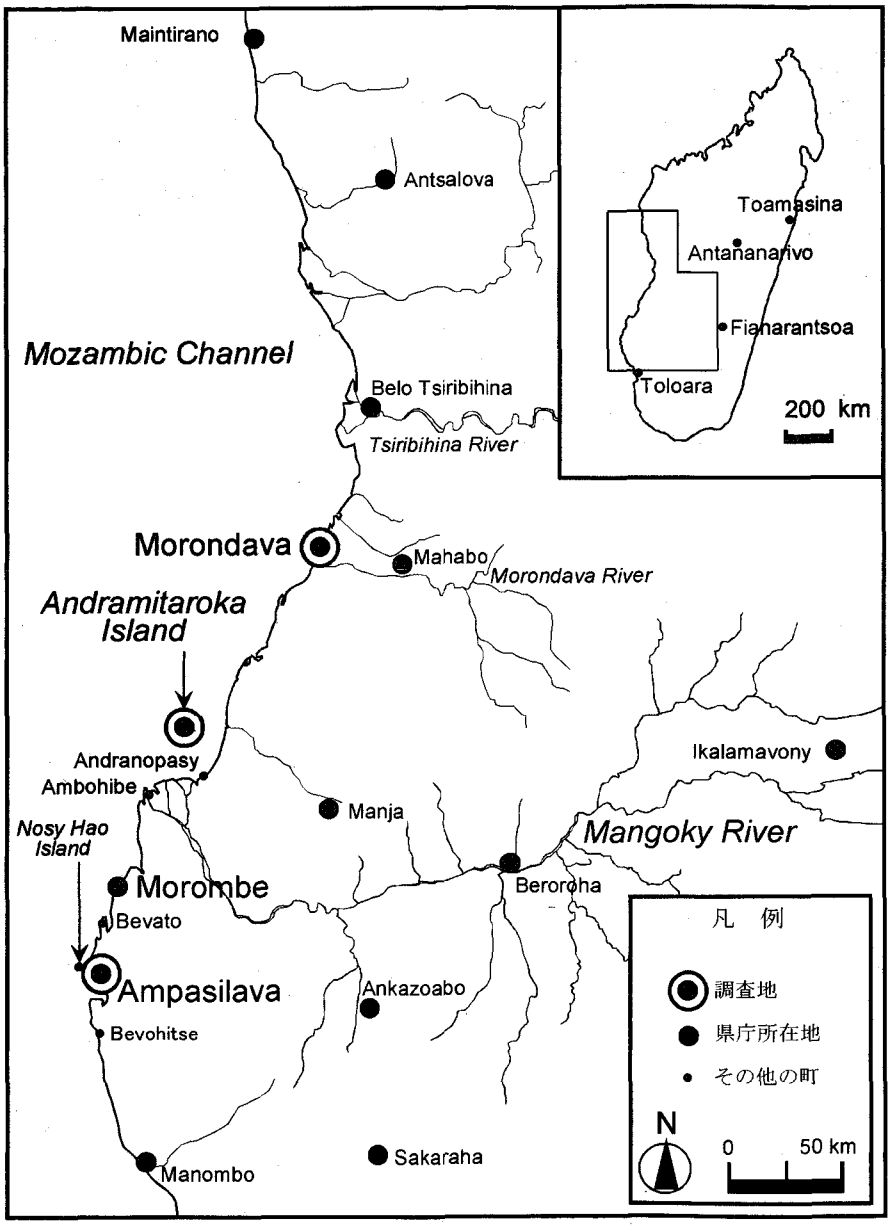

図1 調査地の位置（Foiben-Taosarintanin' i Madagasikara [1990. 初版 1966] 発行 200 万分の 1 地勢図をもとに作成）

約 50 km 離れた海岸沿いに位置する（図 1）。ムルンベ市からの往復には，しばしば，全長 8-9 m の航海用カヌーが用いられる。このカヌーは，刳り舟の縁に板を接いで舷側を高くし，右側に舷外浮材を備えたシングルアウトリガー式のもの（Hornell 1920;

Faublée and Faublée 1950; 飯田 2000）で，荷物や人の輸送のほか，沖の堡礁や礁斜面における漁撈に用いられる。海岸と堡礁の間の静かな海域で日常的に漁業をおこなうさいには，全長 3-4 m の小型カヌーが用いられる。船外機や動力船はほとんど普及していない。アンパシラヴァ村の人口は約 200 人，38 世帯であった。

アンパシラヴァ村の位置するマダガスカル島南西部は，貿易風や季節風の影響が少なく，島内でもっとも乾燥した地域である。たとえばムルンベ市では年間降水量が 453.7 mm で，年間降雨日数はわずかに 32 日しかない。雨季と乾季の区別は明瞭で，12 月から 3 月にかけての雨季をのぞけば，月間降水量が 30 mm を超えることはない（Griffith and Ranaivoson 1972）。また，島の西側斜面が緩やかなために海岸部の水深は浅く，降水量が少ないこともあって，モザンビーク海峡にはわずかの川しか流れ込んでいない。この結果，マングローブ林の優占する河口域をのぞけば，サンゴ礁が広い範囲にわたって分布している（Pichon 1972）。アンパシラヴァ村付近では，海岸部の裾礁のほか，沖合 5 km 付近に堡礁が発達しており，後者の一部はヌサオ島（Nosy Hao）を形成している。礁池，礁原，礁湖，礁斜面などのさまざまなサンゴ礁地形は，アンパシラヴァ村民にきわめて多様な漁場を提供している。

ヴェズの経済生活におけるもっとも基本的な単位は，ひとつの炊事場で調理した食事を分け合い家屋を共有する「世帯」である。これに相当する語はマダガスカル語ヴェズ方言にないが，ヴェズたちはこの単位を「私たち家屋を共有する者たち（*zahay miharo tsano*）」もしくは「私たち親子（*zahay mianake*）」と表現する。じっさい，世帯の範囲は，夫婦とその子から成る核家族に相当するのがふつうである[1]。したがって，ほとんどの場合，1 人の男性と 1 人の女性が実質的労働力となる。子どもの数が多い場合には年上の子が労働力となることがあるが，子どもたちは仕事を覚えて一人前になるとすぐに結婚する傾向にあるため，一世帯の労働力はせいぜい 4 人といったところである。

アンパシラヴァ村において，世帯は消費の単位であるが，必ずしも生産の単位となっていない。世帯内部の労働力だけでは，生産性の高い漁撈集団を編成するのに十分でなく，複数の世帯でより大きな生産単位をつくることが好まれるためである。ここではこの単位を「複合世帯（Complex household）」と呼ぼう。複合世帯内部のすべての世帯は，たとえ労働力や漁具を供出していなくても，ほぼ毎日漁獲の分配を受ける。つまり，複合世帯内部では，漁獲だけでなく労働力や資本が共有されているのである[2]。こうした観点でアンパシラヴァ村の 38 世帯を区分すると，17 の複合世帯に分けることができた。その内訳は，5 世帯から成るものが 2 つ，4 世帯から成るものが 1 つ，3 世帯から成るものが 3 つ，2 世帯から成るものが 4 つ，1 世帯だけのものが 7 つである。

複合世帯内部の各世帯は，親族関係で相互に結びついており，この紐帯は長期に持続する。図 2 は，経済分析の事例として取り上げるふたつの複合世帯の家系を示した

ものである。すべての世帯の少なくとも1人が，複合世帯内部の他の世帯の一員と親子ないしキョウダイの関係にあることがわかる。このことから，複合世帯の変遷を類推することができよう。最初，ある世帯の一員である若者が結婚して新しい家屋を建造し[3]，両親からは独立したと見なされるようになる。これによって新しい世帯が生まれるわけだが，若者の世帯は，その後も両親の世帯と労働力や漁具を交換して依存の関係を続ける。言いかえれば，消費の点では独立しても生産の点では複合世帯の一部として機能し，両親の世帯やキョウダイの世帯と協働を続けるのである。こうした協働は，両親の死後もなお持続するが，第三の世代が家計支持者として主要な役割を果たすようになると，それまで世帯を結びつけていた関係が徐々に疎遠になり，複合世帯は分裂する。こうしたモデルは，アンパシラヴァ村のすべての複合世帯にあてはまる。17のうち16の複合世帯は，夫婦もしくはその一方の世帯と直系の子孫の世帯から成っており，残る1世帯は，両親を亡くした兄の世帯とその妹の世帯から成っていた。つまり，世帯が核家族に対応するのに対し，複合世帯は拡大家族に対応してい

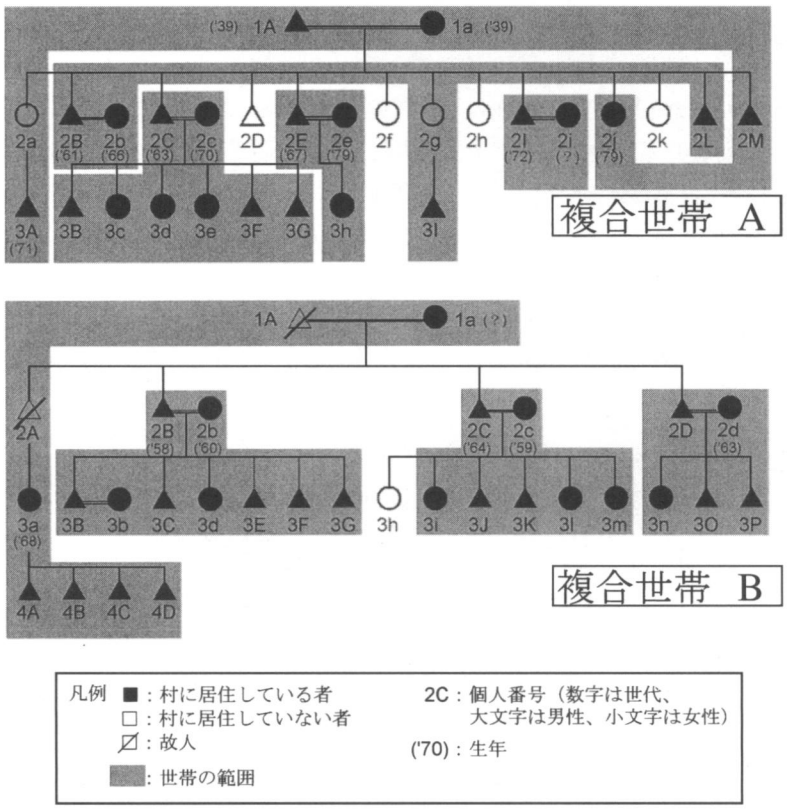

図2　調査対象となった複合世帯の家系図

るのである。以下，本論文で「家族」と表現するとき，経済的には複合世帯にあたる拡大家族を指示するものとする。

アンパシラヴァ村の成人男性の大多数は，村の地先で漁撈をおこなうだけでなく，遠隔地における季節的な漁撈にも従事している。そのキャンプ地のひとつは，アンパシラヴァ村から240 km離れたムルンダヴァ市（Morondava）であり，もうひとつは140 km離れたアンザミタルカ島(Andramitaroke)である(図1)。1996年には，アンパシラヴァ村の成人男性40人のうち62.5%にあたる40人が，2つのキャンプ地のうちいずれかを訪れていた。各漁師の出漁期間を図3に示す。年間の出漁日数は個人により異なるが（s=48.63），平均すると91.64日にのぼった。各漁師は，自身の健康や家族の行事，遠隔地への同行者の都合など，さまざまな要因によって出漁期間を決定するが，季節風が卓越する12月終わりから3月初めにかけてはすべての漁師が出漁を控えていた。この季節には雨が多く，風が安定しないため，漁場までの行き来が困難だからである。1996年に遠隔地でおこなわれていた漁法は，ナマコ刺突漁とサメ刺網漁のふたつで，いずれも生産性の高い漁法と考えられていた。

3 調査方法

データは，1995年から1996年にかけての13ヶ月間，1998年の2ヶ月間，および2001年から2002年にかけての3ヶ月間にわたる筆者の滞在中，参与観察にもとづいて収集した。漁撈活動の変遷に関する情報は，とくに1998年以降の調査で収集した。いっぽう，定量的データは，以下のような手続きをふんで収集した。

村の地先の漁について調べるため，1995年8月1日から14日にかけての14日にかけての14日間(乾季)および1998年1月24日から2月6日にかけての14日間(雨季)，村内すべての世帯の成員に毎日面接をおこなった。質問した項目は，同じ世帯の成員

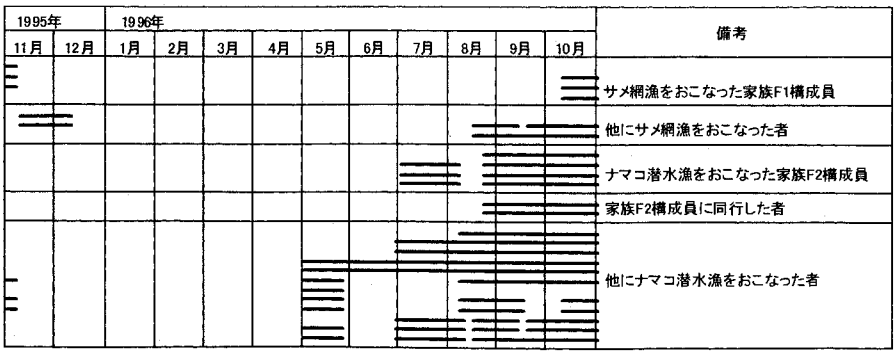

図3　アンパシラヴァ村民が遠隔地に出漁した期間（同一人物の出漁期間を同じ高さの段に示す）

が漁に出かけていたかどうか，おこなっていた漁法は何かということである。分析は，すべての成人男女を対象としたが，14日のうち7日以上村にいなかった者は除外した。そして，各漁法がどれくらいの頻度でおこなわれていたかを明らかにした。1日のうちに同一人物が2つの漁法をおこなっていた場合，各漁法に0.5日を費やしたと見なした。

複合世帯の家計を明らかにするため，2つの家族を家計分析のサンプルとして選んだ。両者の家系を図2に，プロフィールを表1に示す。いずれもほぼ同じ成員数である。家族Bは，1996年当時に漁網を所有しておらず，1997年に数統を購入した。1996年6月9日から22日にかけての14日間（乾季）および1998年1月12日から2月8日にかけての28日間（雨季），1日おきに2つの家族の敷地で時間を過ごすようにして，乾季は各家族につき7日分，雨季は14日分のデータを集めた。この間，家族の成員が出漁あるいは帰漁するたびに，その時刻と魚種ごとの漁獲重量・尾数を記録した。また，どれだけの重量・尾数がどのように分配されるか，すなわち売却，調理，譲渡されたのかどうか，自家消費，保存，譲渡のために誰がどのように加工したかも記録した。さらに，各世帯が消費した主食作物の種類と量も記録した。

最後に，遠隔地の漁撈に関しては，1996年10月12日から25日の14日間にかけてアンザミタルカ島で，10月27日から11月9日の14日間にかけてムルンダヴァ市で観察をおこない，出漁時間と漁獲，分配方法を記録した。

4 村の地先における日常的な漁業

アンパシラヴァ村で観察された漁法を表2に示した。いずれも，網漁・釣漁・刺突漁の3つに大別できる。前2者は，ヴェズ方言における *mihaza* および *maminta* という動詞と対応したカテゴリーであるが，刺突漁は，ヴェズにとってひとまとまりのカテゴリーと考えられてはいない。この村では，大部分の漁法が浅い水域でおこなわれ，潮位に大きく影響されている。

表3は，村人が14日間におこなっていた漁法の割合を示したもので，季節差より

表1　調査標本となった家族のプロフィール

		家族A	家族B
構成員数		22	27
成人男性数		6	4
成人女性数		6	6
少年数	(6-14歳)	4	10
幼児数	(6歳未満)	6	7
漁網の所有		あり	なし（1996年）／あり（1998年）

表2　アンバシラヴァ村でみられた漁法

漁の種類	細目（ヴェズ方言）	方法	頻度	潮
網漁 (*mihaza*)	*manao harata talirano* (*mihaza*)	追い込み刺網	++	大潮低潮時
	manandrake harata	置き刺網（浅瀬）	+	大潮高潮時
	manao drañòke	置き刺網（沖合）	+	小潮
	manao harata be	まき網	+	大潮低潮時
	manao jarifa	サメ刺網	−	
	mandaro *	魚毒漁	−	大潮低潮時
釣漁 (*maminta*)	*maminta*	釣り	++	
	maminta hale	夜釣り	+	
刺突漁	*mañirike*	潜水漁	++	
	mihaky	磯漁り	++	大潮低潮時
	mila zanga hale	夜のナマコ漁	+	大潮低潮時
	mitinotino	舟上からの刺突漁	+	大潮低潮時
	mive fano	ウミガメ刺突漁	−	

* この漁法は，刺突漁にも分類できる。魚が漁網で包囲されたのち，ヤスで突くことも多いからである。

も性差が顕著である。男性は，さまざまな漁法に従事しているものの追い込み刺網漁がもっとも多く，女性では磯漁りをおこなうことがほとんどだった。これは，男性が漁に従事し，女性が家事に従事するという性分業を反映している。限られた時間にのみ女性が漁に出ることは，表3の最下段に示した出漁日数の差にもあらわれている[4]。いっぽう磯漁りは，礁原が干出したときにしかおこなうことができず，1ヶ月のあいだでもおこなう時間が限られているため，出漁時間を多くとれない女性にも適している。さらに，水面よりも上でおこなう磯漁りは，水面下でおこなう他の漁法ほど複雑な認知地図を必要としないため，育児や家事に忙しい女性であっても，容易に上達することができる。

季節差は，出漁日数にはっきりあらわれている。雨季は乾季にくらべ，男性の出漁頻度が増すのに女性の頻度は減っている[5]。これは水産資源の状態によるのではなく，乾季には壮年の男性が遠隔地へ出漁し，村での出漁日数が減ることに由来する。このことは，屈強な壮年の男性が好んでおこなう潜水漁の割合に関して，季節差がみられることからもわかる。この差は統計的にも有意である（χ^2-test. χ^2=20.96, df=1, p<0.001）。いっぽう女性は，乾季に遠隔地へ行くことは少ないものの，夫がいないあいだには自身も村を留守にして実家で過ごすことが多い。女性の漁が乾季に盛んになる理由は，あまりはっきりしない。夫が留守にして時間を自由に使えることと関係するのかもしれないが，より重要なことは，出漁時間が家事などの進み具合に影響され，一定しないことであろう。いずれにせよ，水産資源の季節変動は，漁撈活動に明確なかたちで影響してはいない。これは，漁場がサンゴ礁環境であり，回遊性資源よりも定着性資源のほうが重要であることと関係しよう。

表3　14日間におこなわれた漁法の割合

	男性		女性	
	乾季	雨季	乾季	雨季
追い込み刺網	44.0%	43.0%	12.9% *	11.1% *
置き刺網（浅瀬）	1.9	3.6	–	–
置き刺網（沖合）	3.2	–	–	–
まき網	15.7	13.6	–	–
釣り	16.7	1.3	–	9.3
夜釣り	–	4.5	–	–
潜水漁	8.3	31.1	–	–
磯漁り	6.9	3.0	87.1	79.6
舟上からの刺突漁	3.2	–	–	–
合計	100%	100%	100%	100%
調査対象人数	23 people	40 people	25 people	39 people
のべ出漁日数	108 days	235 days	85 days	81 days
平均出漁日数	5	5.88	3.96	2.37

＊すべての事例において，男性が同行していた。

調査対象となった家族Aの場合，乾季には2週間[6]で111.03人･時の労働力を投入したほか，他の家族からも8.13人･時の助力を受けていた[7]。雨季には，81.28人･時の労働力を投入し，外から13.53人･時の助力を受けていた。家族Bは，乾季に51.1人･時，雨季に41.96人･時の労働力を投入しており，外からの助力を受けていなかった。季節あるいは家族によって，投入労働力にはほとんど差がないため，生産量を貨幣（FMG[8]）に換算しても大きな差がみられない。ただし，漁獲の大部分は売却されるのではなく家族内で自家消費される。家族Aの場合，労働投入の見返りとして乾季には67,580 FMG，雨季には50,993 FMGを得ており，家族Bは乾季に46,340 FMG，雨季に50,093 FMGを得ていた。これらの数値は，後で遠隔地での漁獲高と比較することにして，最後に，漁法ごとの漁獲効率の違いについてみておこう。表4は，漁法と家族と季節によって漁獲効率が異なるかどうかを示したものである。もっとも明確なのは，磯漁りの漁獲効率が他の漁法にくらべて低いことである。統計的には，漁法・家族・季節によって漁獲効率に有意差がみられたにもかかわらず（Kruskal-Wallis's test. χ^2=25.60，df=11，p<0.01），磯漁りを除く他の漁法のあいだでは有意差がみられなかった（χ^2=9.01, df=7）。これらの事実から，男性は漁獲効率の低い漁法には従事せず，漁法ごとに漁獲効率の差がみられないのに対し，女性のおこなう磯漁りは漁獲効率が低いといえる。

表4　漁法，家族，季節ごとの漁獲効率の比較

漁法	家族	季節	性別	出漁回数 *1	漁獲効率（FMG/人・時）	
					平均	標準偏差
追い込み刺網	A	乾季	男，女	5	1,557	689
	A	雨季	男，女	8	1,073	423
	B	雨季	男，女	11	1,014	433
まき網	A	雨季	男	5	1,158	1,145
置き刺網（浅瀬）	B	雨季	男	5*2	2,945	2,436
釣り	B	乾季	男	6	739	387
潜水漁	B	乾季	男	5	1,297	748
	B	雨季	男	1	1,064	—
磯漁り	A	乾季	女	5	323	193
	A	雨季	女	1	150	—
	B	乾季	女	2	97	64
	B	雨季	女	3	527	574

*1 乾季は7日間，雨季は14日間の回数。
*2 漁網が夜に設置され，それにかかる時間を観察できなかったため，漁獲効率の算出にあたっては，他の機会に測定した設置時間と同じく20分を要したと考えた。

5　アンザミタルカ島におけるサメ刺網漁

アンパシラヴァ村民の出漁先のひとつであるアンザミタルカ島は，本土の沖合約30 kmに位置する。アンパシラヴァ村からの距離は140 kmである。アンパシラヴァ村の漁師たちは，カヌーで帆走してこの島を訪れ，カヌーの帆柱や棹，ヤスなどを骨組みとしたテントを作ってその中に住む。筆者が1996年10月8日と19日におこなったセンサスによれば，この島には135人の人びとが25のグループ[9]に分かれて幕営していた。人数の内訳は，男性106人，女性20人，および労働力としては期待されていない幼児9人であった。このうち1グループは対岸の村からやって来ており，10グループは85 km離れたムルンベ市から，残りのグループはムルンベ市からさらに20-70 km離れた村々からやって来ていた。すなわち，わずか1例をのぞき，漁師たちは85-155 kmも離れた土地からやって来る外来者であった。アンパシラヴァ村民もこの外来者に含まれる。

アンザミタルカ島でサメ網漁がいつ始まったかは正確にわからないが，1990年頃のことだったと推測される。それ以前，アンパシラヴァ村では，サメは小型の網で混獲されるのみだった[10]（cf. Koechlin 1975: 42）。もっぱらサメを捕るために大型の網がはじめて村で作られたのは，1991年のことである。村人たちは，フカヒレが高い価格で売れることを聞き，ナイロンの細引きや中古の漁網を使って想像をたくましくしながらそれを試作し，試行錯誤の末に漁法を洗練したのだという。1993年に，家族Aの一員（図2の2I）が，村から500 km離れたマインティラヌ市（Maintirano）へ行っ

てサメ刺網漁をした。このときにサメが多く捕れたので，北の地域では村の地先よりも漁が容易だとわかった。

アンパシラヴァ村の漁師が言うように，島での暮らしは村ほど快適ではない。それにはさまざまな理由があるが，2つが最大の理由であろう。憑依霊[11]の定めた禁忌[12]と，水の不足である。これらはまた，島が長らく無人島であった理由でもある。アンパシラヴァ村の漁師によると，霊たちは，島に生えるタマリンドを捧げてその根元で儀礼をとりおこなうよう，ふだんは対岸の村に住む霊媒たちに命じたという。このため，霊は島の所有者または主（*tompo*）であると考えられ，禁忌の侵犯は霊を怒らせて超自然的災厄の原因になると信じられている。たとえば，島で楽器やラジオを鳴らしたり，タマリンドのそばで用便をしたり，浜辺で食器を洗ったりすることは，すべて禁忌である。ヤスを地面に突き刺すこともかつては禁忌だったが，霊に捧げ物をして許しを乞うたために，現在では禁忌でなくなっている。驚くべきことに，島の動物，なかんずく夜中にテントのそばを走り回るネズミを驚かせることも，島では禁忌となっていた。たとえネズミが体の上を走り回っても，人びとはそれをそっと手で追いやらなければならない。殺すことは論外である。このため，島にはネズミがはびこっており，人びとは食料や水容器などの荷物が齧られないよう注意を払わなければならなかった。

もうひとつの問題である水不足は，アンザミタルカ島がサンゴ島で水が湧かないことによっている。このため漁師たちは，数日ごとに，飲用や調理用の水を汲みに本土まで行かなくてはならない。この航海はカヌーで半日がかりである。水は，50-100 *l* のプラスチック製容器に入れて運ばれる。もしこの容器がネズミに齧られて損傷を受ければ，漁師たちは滞在を切りあげて家路につかなくてはならない。真水は貴重であるため，海の中で水浴びをし，衣服も洗濯せずに着たきりにしておく。燃料の薪も同様に本土から持ってこなくてはならないが，水ほど頻繁に運ぶ必要はない。

島は，サメのほかに，ナマコを捕るのに適した漁場も近い。ナマコ漁については次章で述べよう。サメ漁のためには，漁師たちは毎日1度，水深70 mほどの水域に固定した刺網を確認するため，帆走して海へ出る。調査対象となった家族Aは，高さ5 m，長さ180 m，目合い18 cmほどの刺網を用いていた。漁獲対象はメジロザメ（*Carcharhinus* spp.，ヴェズ方言では *akio foty*），シュモクザメ（*Sphyrna tudes; akio viko*），トンガリサカタザメ（*Rhynchobatus djiddensis; soroboà*）などである。サメの肉は，漁師自身が消費する分を除き，細長く切り分けて売却のために塩漬けにする。だが，もっとも効果なのは鰭の部分で，中華食材として香港やシンガポールへ向けて輸出される。大きいサメが1頭捕れれば，第1背鰭，尻鰭，尾鰭，そして1対の胸鰭と，5つのフカヒレがとれることになる。

表5は，家族Aの男たちが2週間の調査期間のあいだに得たフカヒレの売却量を

表5　家族Aが2週間に獲たフカヒレ

等級	大きさ	数量	重量（kg）	単価（FMG/kg）	金額（FMG）
1等	25 cm –	8	4.28	225,000	963,000
2等	20 – 25 cm	8	1.37	150,000	205,500
3等	15 – 25 cm	46	1.95	60,000	117,000
4等	– 15 cm	37	0.50	30,000	15,000
合計	–	99	8.10	–	1,300,500

示している。すべてのフカヒレは，大きさに応じて4つの等級に区分される。ここでいう大きさとは，付け根の中心から先端までの長さである。そして，ムルンダヴァの仲買人に買い取られる。もっとも大きい1等のフカヒレは，わずか3頭のサメからとれたものであり[13]，数量（個数）では8%にしかすぎないが，重量では全体の53%，売却額は74%にものぼる。つまり大きなサメは，たとえ1頭でも小型のサメが多数捕れるよりも値打ちがあるのである。

2週間のあいだに家族Aはサメ刺網漁を10回おこない，109.70人･時の労働力を投入した。このほかに，サメ刺網に結びつける寄せ餌として魚を得るため，小型の刺網（表2の *drañòke*）を用いて11回漁をおこない，66.57人･時の労働力を投入した。この結果，サメ刺網と小型刺網を合わせて1,932,638 FMGに相当する収入を得たが，そのうち自家消費されたのは4.9%にすぎなかった。この全収入の値と比べても，3頭のサメからとれた8つのフカヒレは50%を占めている。

6　ムルンダヴァ市におけるナマコ刺突漁

もうひとつのキャンプ地は，トゥリアラ州ムルンダヴァ県（Morondava）の県庁所在地ムルンダヴァ市である。市街部の人口は2万人を超えると推定され，アンパシラヴァ村からは240 km離れた位置にある。アンパシラヴァ村民は，この町を拠点に，もっぱらナマコ刺突漁に従事していた。この町からは，マダガスカルの首都アンタナナリヴ市（Antananarivo）まで道路が通じているため，ナマコを大量に買い付ける仲買人が多くやって来る。つまりムルンダヴァ市は，漁師たちにとって，漁場と市場の両方を提供しているわけである。この町は面積が広いため，何人の漁師が幕営しているのかを知ることはできなかったが，1996年にアンパシラヴァ村の漁師たちは互いにまとまって幕営しており，他の漁師たちからは明らかに区別されていた。その人数は26人で，子どもが1人と女性が1人いたほか，アンパシラヴァ村在住者が18人，アンパシラヴァ村で生まれたが他村に住む者4人，アンパシラヴァ村民の姻族で他村に住む者2人だった。彼らは6つのグループに分かれ，それぞれのグループが食事やカヌー，テントなどを共有していた。

ナマコは，アンパシラヴァ村地先のサンゴ礁でもとれるものの，後で論ずるような資源枯渇のために漁獲量が限られている。アンパシラヴァ村民が遠隔地において集中的なナマコ漁を再開したのは1992年，すなわち，家族Aがマインティラヌ市で初めてサメ刺網漁を試みた前年であった。家族Bの男たちは，マインティラヌ市に高価なナマコが豊富にあることを聞き，そこへ至る航路を模索して，水中眼鏡とヤスだけで大量の大型ナマコを得ることに成功したのだという。マインティラヌ市はアンパシラヴァ村から遠いので，近年では，もっと近いムルンダヴァ市やアンザミタルカ島の漁場がよく利用されている。アンザミタルカ島とは異なり，ムルンダヴァ市には多数の漁民が居住しているが（Astuti 1995a），潜水漁は得意でない。潜水漁に適した透明度の高い水域が，はるか沖合にあるためである。彼らは，ナマコ刺突漁よりも，レストランでヨーロッパ料理として用いられるサワラの釣漁をおこなっていた（Astuti 1995a: 27）。つまり，アンパシラヴァ村の漁師は，ナマコ刺突漁の競合者がいない漁場を見出したのだといえる。

アンザミタルカ島とは異なり，ムルンダヴァ市では飲料水が容易に入手できる。燃料の薪も，現金で購入するのが普通ではあるが，同様に入手しやすい。守らなければならない禁忌もないし，目抜き通りでの買い物という楽しみもある。それにもかかわらず，ただひとつの理由により，漁師たちの生活は過酷なものとなっている。すなわち，漁場がはるか沖合30 kmに位置するため，漁師たちは往復のために少なくとも5時間をかけなければならない。彼らは，午前4時頃に起床すると，朝食もとらずただちに漁場へ出発する。朝は風がおだやかなので，順風でも3時間以上かかるようだ。無風であったり逆風だったりすると，すでに何時間を費やしていようとも，漁場に着いて漁獲を得る前にキャンプ地へ戻らなくてはならない。無事に漁場に着いたときには，キャンプ地に帰り着くのは午後2時頃である。それからナマコを塩漬けにして保存がきくようにしておき，町へ出てあたたかい飲み物とドーナツの軽食をとる。これが1日のうち最初の栄養摂取で，食事らしい食事は日没後に1度とるだけである。塩漬けにしたナマコは，10日に1度ほどの頻度でゆでる。風が強くて海に出られない日をこの日にあてるのがふつうである。ゆであがったナマコは，ムルンダヴァに住む仲買人や，アンタナナリヴ市から来る仲買人に売却される。こうして集められた荷は，アンタナナリヴ市や外港トアマシナ市（Toamasina）でさらに別の仲買人に受け渡され，最後にはシンガポールや香港に向けて輸出される。

漁場までの往復の不便にもかかわらず，アンパシラヴァ村の漁師たちがキャンプ生活に耐えているのは，得られるナマコが高価なためである。ムルンダヴァ市で採取されるナマコは，イシナマコ（*Holothuria nobilis; zanga benono*），バイカナマコ（*Thelenota ananas; zanga borosy*），クリイロナマコ（*Actinopyga mauritiana; zanga rorohankena*）などである。アンパシラヴァ村では，これらの種類が希少なうえ，サイズが小さく1

個あたりの価格が安い。たとえばクリイロナマコは，アンパシラヴァ村でもムルンダヴァ市でもキロあたり単価が12,000 FMGであるが，アンパシラヴァ村では体長が10-15 cm，1個あたり150-400 FMGであるのに対し，ムルンダヴァ市では体長が20 cm以上で1個あたり1,000-2,000 FMGほどである。イシナマコはキロあたり単価もサイズによって変わり，アンパシラヴァ村では5,000-15,000 FMG/kg，1個あたり100-500 FMGであるのに対して，ムルンダヴァ市では30,000-39,000 FMG/kg，1個あたり10,000-20,000 FMGにのぼる。家族Bは，2週間のあいだに2つのカヌーに分かれてのべ16回のナマコ刺突漁をおこない，321人・時の労働力を投入した。その結果，1,315,060 FMGに相当する収入を得て，自家消費分はそのうち0.91%にすぎなかった。

7 漁家経済のなりたち

遠隔地における漁撈活動，すなわちサメ刺網漁とナマコ刺突漁は，村の地先の日常的な漁にくらべて多くの現金収入をもたらす。表6は，遠隔地漁と地先漁の漁獲効率を比較したものである。アンパシラヴァ村の地先では，家族や季節によって漁獲量や漁獲効率が大きく変わることはない。これはすでに表4で示した。しかし遠隔地漁では，これらに比べて漁獲効率がはるかに高くなっている[14]。アンザミタルカ島ではサメ刺網漁だけでなく，寄せ餌となる魚を捕るために小型の刺網漁がおこなわれているが，これを考慮に入れても，漁獲効率はなお高い。次に顕著な点は，遠隔地では漁獲を売却する比率が高いことである。これらの点から，遠隔地における漁が莫大な現金収入源としての性格を持っていることがわかるだろう。

表6に示した漁獲高を，家族全体が消費する主食作物の購入費[15]と比較して示したのが表7である。これをみると，遠隔地漁と地先漁の違いがよくわかる。いずれの家族においても，2週間における購入費はほぼ150,000-200,000 FMGに達したが，アンパシラヴァ村地先での総漁獲高はこれより少なく，100,000-150,000 FMGにしかすぎなかった。この値は，最低限の主食購入費とほぼ等しい。しかし実際の生活では，

表6　2週間の漁獲効率の比較

家族	漁場	季節	労働投入量 [A]（人・時）	出漁回数	漁獲量 [B]（FMG）	売却率（%）	漁獲効率 [B/A]（FMG/人・時）
A	アンザミタルカ島	乾季	176.27	21	1,932,638	95.1	10,964.08
	アンパシラヴァ	乾季＊	119.17	20	135,160	49.7	1133.61
		雨季	94.82	14	101,986	49.9	1075.58
B	ムルンダヴァ市	乾季	321	16	1,315,060	99.1	4096.76
	アンパシラヴァ	乾季＊	102.2	26	92,680	60.3	906.85
		雨季	83.92	20	100,185	22.6	1193.82

＊アンパシラヴァ村では，乾季の調査日数が各家族につき7日間であったため，値を2倍にしてある。

表7　2週間の主食作物購入費

家族	実質的な購入費		最低限と推定される購入費 *2
	乾季 *1	雨季	
A	231,300	169,310	108,889
B	187,060	147,200	126,583

*1 7日間の調査日数だったため，値を2倍にしてある。
*2 すべての成員が，もっとも安価な作物であるトウモロコシ（700 FMG/kg，3,600 Cal/kg）だけを食べて必要な熱量を摂取したと仮定して算出した値。成人男性は毎日2,500 Cal，女性はその80%，少年は70%，幼児は40%が必要だと仮定した。

食費に加えて日用品や贅沢品などの出費が必要だし，実際の現金収入は漁獲高よりはるかに少ない。なぜなら，漁獲の大部分が自家消費されるからである。つまり，家族全体が生活するために必要な漁獲高を，地先漁だけではまかないきれないということになる。

いっぽう，遠隔地における漁獲高は，アンパシラヴァ村地先の10倍にも達する。アンザミタルカ島では1,932,638 FMG，ムルンダヴァ市では1,315,060 FMGであった。これらの値は，実際の主食購入費の8倍もしくはそれ以上に相当し，村の日常生活における過剰消費が生む不足分を補って余りある。遠隔地での季節的漁がもたらす多額な現金収入は，さまざまな贅沢品を購入するだけでなく，必需品を購入して漁家経済を維持するためにも不可欠だといえる。

漁家経済において，遠隔地漁はかくも重要な役割を果たしているが，この営みが始まったのは1992年以降のことにすぎない。この事実は，次のような興味深い問いを投げかけることになる。遠隔地漁が始まる以前には，漁師たちはいかにして生計を立てていたのだろうか？　まったく別の経済活動のうえに成り立っていたのに違いない。次節では，過去におけるアンパシラヴァ村の漁撈活動について述べてみたい。

8　1970年以降における漁撈活動の発展

1970年頃までは，アンパシラヴァ村民は村の近くで魚を捕り，200 kmほど離れたマングキ川（Mangoky）上流で魚と農作物を物々交換することが多かった。鮮魚でなく塩干魚だったので，こうした遠方の住民との交換が可能だったのである。遠方の農村に比べ，近隣の農村は気候が厳しく生産力が低かったので（Tucker 2000），よきパートナーとはならなかった。

しかし，1970年になって貨幣経済が急速に浸透すると，アンパシラヴァ経済における物々交換の重要性は徐々に低下していった。この時期には，一部の漁師が他の漁師から魚を買い付けるようになった。都市部に住む仲買人に，できるだけ多くの塩干魚を供給するためである。こうした行商は，30年後の現在もなお一般的である。こ

れと時を同じくして，ナイロン糸製の漁網が導入され，漁獲効率が高まった。これらの現象の直接的な原因は，聞き込みでは特定できなかったものの，内陸交通の発達が大きな一因だったと考えられる。すなわち，ムルンベ市とトゥリアラ市のあいだの道路が新たに舗装され，ムルンベ市の商人たちのあいだでトラック輸送が普及し，加工した魚の需要が高まるとともに新素材の普及が促されたのである。

トゥリアラ市よりもさらに遠くの内陸都市では，魚だけでなく，他の海産物に対する需要も高まった。ナマコもそのひとつである[16]。1979年頃にアンパシラヴァ村でナマコを買い付け始めた者によれば，当時はサンゴ礁にナマコが豊富だったので，全長7mのカヌーが1日のあいだにナマコで一杯になったという。この当時，ナマコ1個の価格が5 FMG，すなわちキャッサバ25 gと同じ程度であったが，現在では50-250 FMG，すなわちキャッサバ200-1,000 gと同じ程度になっている。当時は価格が安かったわけだが，漁師たちはこれを収入の増加として歓迎したようである。コクランの民族誌的研究（Koechlin 1975: 111-114）も，当時のナマコ好景気について述べている。それによれば，家族が1ヶ月に獲るナマコが400 FMGにのぼったのに対して，同じ期間に消費される作物の価格は100 FMG未満であったという。

他の海産物として，イトマキボラ（*Pleuroploca trapezium; bozike*）やテングガイ（*Chicoreus ramosus; dronka*）などの貝類の蓋（*fimpy*）が，この時期に商品化した。これらの蓋は，香料の原料としてインドに輸出される。イセエビ類（*Panulirus* spp.; *tsitsike*）も商品化した。ナマコと同様にイセエビも，価格が現在より安かったが，村の地先のサンゴ礁に豊富だった。イセエビを消費したのは，近隣の都市に住むヨーロッパ人や旅行者である。アンパシラヴァ村民は，イセエビを売却するために数時間をかけて航海し，翌日に村へ帰ってきたという。それだけの航海に見合う金銭的見返りがあったといえるだろう。

新たに商品化された海産物として，ヴェズ方言でトゥヴェ（*tove*）と呼ばれる，カタクチイワシの一種（Bauchot and Bianchi（1984）によれば，*Stolephorus*属もしくは*Thryssa*属）がある。この魚は，1995年以降アンパシラヴァ近海に回遊してこなくなったので，筆者自身はこの魚を実見していない[17]。1970年以前にはこの魚が注目されることはなかったが，1970年代と1980年代には，9月から12月にかけて，ムルンベ市からトゥリアラ市までの海域（海岸線にして300 km）がトゥヴェで埋め尽くされたという。この季節にはトゥヴェが豊富であったため，村民が総出でまき網漁をしても捕り尽くせなかったという。この魚も，重要な現金収入だったわけである。

しかし，これらの資源は，1980年代頃になるとさまざまなかたちで枯渇し始める。たとえばナマコは，とくに大きいサイズのものが浅い水域で減少した。これは，資源枯渇の典型的な兆候で，漁師たちも「ナマコが尽きた」という言い方で説明する。「尽きた」という意味のマダガスカル語*lany*または*fonga*は，備蓄していた食糧や燃料を

使い果たしてしまったときに用いる表現である。資源減少の結果，村の地先でのナマコ採取は，現在のアンパシラヴァ経済のなかでは副次的な役割しか果たしていない。また，量的データはないものの，イセエビや貝類も減少した。同様の問題は，トゥヴェをはじめとする魚類一般についても生じたようである。量的データはないものの，トゥヴェ以外の魚も数が少なくなってしまったと漁師たち自身が報告している。漁師たちの話が正しいとすれば，人口増加[18]と技術革新に連動して起こった漁獲圧の増加が資源枯渇をもたらした可能性が高い。

資源量の減少の結果，地先の漁は停滞し始め，漁獲を補う現金収入を漁師たちはめいめいに模索するようになった。カヌー建造や農耕に依存する者，魚の価格が高い都市部へ季節的に移動する者，資源がいまだ豊富な孤島に時おり訪れる者など，さまざまであった。

要約すると，アンパシラヴァ村の漁家経済は，1970年代以降に大きな変化を経験した。初期の段階では海産物の商品化が漁師に利益をもたらしたが，人口増加や技術革新によって資源枯渇に拍車がかかり，好景気は長く続かなかった。資源が持続的に管理されなかったのである。しかし漁師たちは，遠隔地への出漁によってこの問題を解決した。遠隔地出漁は，漁家経済における慢性的な停滞を打開したのだといえる。こうした解決は，漁民による移動の自由が保証されてはじめて可能なことであった。

9 自律的資源利用にむけて

漁民の移動は，資源枯渇の根本的な解決ではありえない。遠隔地でのさらなる荒廃をもたらす可能性があるからである。筆者が1998年にアンパシラヴァ村を訪れたとき，ムルンダヴァ市とアンザミタルカ島では大型ナマコが浅い水域に少なくなってきていたため，人びとはムルンダヴァ市よりさらに遠くの漁場へ出漁することを計画していた（飯田 2002）。この計画はけっきょく実現せず，2002年の時点で実行した者はまだいなかったが，資源問題はますます深刻になってきたようにみえる。加えて，市場経済の影響は拡大を続け，漁師たちの自律性を低下させている。アンパシラヴァ村のある漁師によれば，コンプレッサーを用いて潜水士に空気を送り込むフーカー式装置を，首都から来たとおぼしき仲買人が1996年に導入し，雇用した漁師に与えてナマコ採取をさせていたという。これは，アンザミタルカ島とムルンダヴァ市の中間にある本土側の漁村の話であるが，アンザミタルカ島でも2001年に同じ装置が導入された。フーカー式潜水器を用いれば漁獲効率が高まるため，筆者が会った漁師はすべて，潜水器の利用者が資源を一掃してしまうのではないかと危惧していた。国家レベルの法律でフーカー式潜水器の使用を禁止しなければならないことは明白であるが，たとえそうなったとしても，資源問題はますます加速していくと思われる。根本的な

解決はどのようになされるべきなのだろうか？

もっとも望ましいのは，慣習的な海面利用慣行を活かす方向性であろう。ヴェズのあいだではTURFが明瞭でないが，技術的および社会的な理由により，インフォーマルななわばりが確立されてきた。まず，漁師たちはカヌーを漕いで漁場まで行くことが多いため，通常の操業範囲は村から3 km以内に収まる。帆走カヌーならばより遠くまで行くことが可能だが，小回りが利かないので，サンゴ礁内での漁には好まれない。その結果，隣村から5 km以上離れたアンパシラヴァ村では，他の村から来た漁師たちたちと競合することはほとんどない。遠方の村まで帆走して，そこを拠点に出漁することも可能であるが，そうするためには，村の寄り合いで承認を受けるか村に親戚を持つかという条件が必要である。アンパシラヴァ村の漁師たちが，きわめて不便なアンザミタルカ島やムルンダヴァ市をキャンプ地に選んだことも，こうした観点から説明できるだろう。すなわち彼らは，他の漁師と競合しなければならないような水域を回避しているのである[19]。ムルンダヴァ市には漁師が住んでいるが，潜水漁に適した透明度の高い水域がはるか沖合にあるため，潜水漁に秀でてはいない。アンザミタルカ島は，水や薪の不足と孤立性のために，漁師がまったく住んでいなかった。つまり，アンパシラヴァ村民によるキャンプ地選定は，インフォーマルななわばり慣行の存在を示唆しており，資源管理にもこれをうまく応用することができる。国家レベルの法制度がこうした慣習法の権限を保証すれば，地域に基盤をおいた資源管理に向けて第一歩が踏み出せると考えることも可能である。

しかし，地域に基盤をおいた資源管理制度として慣習法の権限を認めたとしても，それをフォーマルなかたちに整えることは必要であろう。少なくとも，適用する区域の境界と利用者グループの範囲を明確に定める必要がある。こうした措置は，ある程度まで，母村の地先の資源枯渇のため他地域へ入漁しようとする漁業者を排除したり，生計を立てるうえでの選択肢だった移動の自由を制限したりすることにつながる。漁民の移動は，1990年代よりはるか以前から重要な戦略であった。村の年長者からの聞き込みによれば，おそらく1920年代頃にアンパシラヴァ村が成立したが，それを構成していたのは内陸の農民や近隣の漁村民，アンブヒベ（Ambohibe; 図1）から来ていた季節的移民などであった。移動がこのような生活維持戦略のひとつであったことを考えれば，過剰な漁獲というジレンマを解決するために漁民の移動性を制限すべきだとは思えない。いかなる決定を下すかは，漁民自身にゆだねるべきだと筆者には思える。

そこで，集合的意思決定（collective action）の問題が浮上する（Runge 1992）。ヴェズ社会は，政治権力を有する代表者や制度を持ってこなかったため，こうした複雑な意思決定のために交渉をおこなうことは困難であるようにみえる。しかし，現在のように変化が急速な状況においては，さまざまな意思決定をおこなうことがヴェズ漁民

にとってますます重要となってこよう。境界や移動性に関する意思決定は，そのさきがけにすぎない。もし彼らが，境界を画定して権利を樹立するべく意思決定をひとたび下せば，地域に基盤をおいた資源管理を運用するために次のような意思決定を絶え間なく下していかなければならなくだろう。禁漁期間をいつにするのか，いかなる漁具の利用を制限するのか，どのくらいのサイズの魚を捕獲するよう許可するのか，などなど。また，もし彼らが移動の自由を尊重するような決定を意識的に下したとしても，あるいは当面の意思決定を回避したとしても，彼らは従来と同じような生活を続けられるというわけではない。彼らは，国家経済やグローバル経済に深く関与するようになったため，マダガスカル国内外の社会に対する空前の依存関係をコントロールしなければならなくなっている。また，社会内部における空前の人口増加にも対処しなくてはならない。彼らは，個人的にも集合的にも，自身の選択を下さなくてはならないだろう。いずれにせよ彼らは，外部経済との関係をいかに維持するかあるいは変革するかという，連鎖的な意思決定を迫られている。もしこうした意思決定を放棄すれば，彼らはみずからの生活における自律性を失ってしまいかねない。

現在のところもっとも望ましい措置は，意思決定のための新しい制度を確立することであろう。この制度は同時に，来るべき問題に対する対応策としても機能する。しかし，共有資源研究で報告されているいくつかの事例によれば，こうした制度を性急に確立しようとすると，地域住民による自律的な意思決定が阻害されかねない。たとえば，ボツワナにおける自然資源の共同管理プロジェクトでは，地域住民がさまざまな団体の一員として意思決定権を分担するよう期待されているが，自発的な参加をうながすことに失敗したという。その結果，このプロジェクトは計画立案者本位になり，人びとは決定的な役割を果たすことができなくなっている（Twyman 2000）。

ヴェズの事例に戻ろう。ここでは，拙速の誘りを受けるよりも，新たな制度に向けてささやかな一歩を踏み出すことを提案したい。それは，村レベルないし地域レベルの集会を開き，漁師たちの置かれた状況について彼ら自信が学んだり話し合ったりするということである。なるほど，ヴェズの人びとは，日常生活においてすでに自分たちの状況を学んだり話し合ったりしている。金儲けの機会や教育，貧困などの話題がそれにあたる。しかし，彼らの話し相手や情報提供者は，同じように地域に住む漁民であることが多く，より広い社会的・経済的文脈に関する情報を多く持ち合わせていないため，どうしても視野が狭くなりがちである。たとえば，筆者が会った漁民の多くは，過剰生産と価格下落の関係をなかなか理解できなかった。もし，漁師たちがこの原理について意識的になれば，生産調整のための集合的意思決定を下したり，新しい制度を編み出したりすることがより容易になろう。もしくは，漁獲を増やすよりも製品の品質を向上するべく，個々の漁師が努めるようになるかもしれない。要するに，より広い社会と情報を共有することで，より広い社会に対する処し方の選択肢が広が

るのである。もちろん，こうした選択肢には，資源管理制度の確立も含まれる（Kottak and Alberto 1993）。

集会を運営し維持するための方法に関しては，多くの問題がある。しかし，それらは試行錯誤を通じて解決していくべきであろう。集会の世話役は，漁師以外の第3者でもよい。集会の話題は，過去数十年の資源減少やフーカー式潜水器の使用，外部者による海面のレクリエーション利用，他の州や国の漁業など，漁師にとっても身近なものがよいだろう。これらの題材は，みずからの置かれた状況を漁師たちが認識する助けとなり，ひいては意思決定や行動決定の際に考慮すべき材料を提供すると期待できる。こうした集会のもうひとつの長所は，メンバーを流動的に保ちつつ運営できる点である。この点は，ヴェズ村落のように移動性の高い社会においては重要である。さらにこうした集会は，外部者に対しても，漁師たちと学んだり話し合ったりする機会を提供するだろう。このことにより，開発計画立案者は，現地の有益な情報を得ることができる。しかし，特定の機能を果たす機関としてこの集会に過度な期待をかけぬよう，われわれは留意すべきであろう。資源管理のための機関と見なすことすら，控えるべきである。この集会は，漁民自身によってその機能を付与されるのでなければ，単に外部者の代理機関になりさがってしまうだろう。

10 結論

本論文の前半では，漁民が国際経済に大きく依存していることを指摘した。また後半では，彼らが直面している資源減少について指摘するとともに，新しい生活を切り開くうえで移動が重要であることを強調した。こうした移動による解決は，地域に基盤をおいた資源管理という根本的解決とは相容れないものである。そこで筆者は，漁民たちがみずからの状況を学んだり話し合ったりできるよう，集まりを設けることを提案した。このことは，根本的解決の一歩として期待できるだけでなく，明らかに，集合的ないし個人的な意思決定および行動決定のために必要な材料を提供するよい機会となる。

本論文は，資源管理の話に始まり，コミュニティのエンパワーメントの話で締めくくることになる。これらの話題はあまり関係ないように見えるが，漁師たちの生計と自律性を維持するという点で，相互に絡み合っていると筆者は思う。1970年代の商品化は，漁師たちの生活に多くの選択肢をもたらしたが，技術革新と人口増加をとおして資源に損失を与えもした。漁師たちは，資源管理をとおして自律性を回復することになろうが，それだけでは十分でない。漁業はつねに，環境的および経済的な不確実性にさらされている（Acheson 1981）ということを想起しよう。漁師たちが国家経済やグローバル経済に次第に関与してくるにつれ，環境リスクの存在が明白になった

が，ことは長期的な経済リスクについても同じであろう。なぜなら，オセアニアに関してヨハネスが述べたように，漁師たちはある程度まで「長くてコストのかかる供給ライン――工業製品に関してだけでなく，今日では食料の大部分に関しても――の末端に位置している」（Johannes 1978）からである。漁民たちの自律性と自足性を最大限にするためには，生物多様性だけでなく地域の選択の多様性を保全するような予防措置が望まれる。

付　記

本稿は，Nobuhiro Kishigami and James Savelle (ed.), *Indigenous Use and Management of Marine Resources*（仮題）に掲載予定の英語論文を日本語に翻訳し，同時に加筆訂正を加えたものである。現地調査にあたっては，平成6-8年度学術振興会特別研究員奨励費「自然資源の持続的利用に関する人類学的研究」，平成11-12年度同奨励費「漁撈民の移動性と社会・環境変動の相互作用に関する人類学的研究」，および平成13-14年度文部科学省科学研究費補助金（奨励研究A）「沿岸漁民の口頭伝承にもとづく，ローカルな経済史・環境史の構築」（研究課題番号13710191）を使用させていただいた。記して感謝いたします。

注

1) 例外として，寡婦や未婚の母，離婚した女性の世帯などがあげられる。こうした，子どもはいるが夫のいない女性たちは，両親と一緒に住むことが多く，この場合には世帯が3世代を含むことになる。また，表2に示した家族Aの2Bの世帯も例外である。2Bの弟である2L，および甥である3Iは，本来ならば1Aに属するはずであるが，2Bは祖先に対して供犠（*soro anake*,「子どもの供犠」の意。Koechlin 1975: 133; Astuti 1995a: 92）をおこなって彼らを養取した。
2) 同様に，複合世帯内部では，異なる複合世帯のあいだよりも，財やサービスの譲渡が頻繁にみられる。たとえば，古着は同じ複合世帯の成員に譲渡されることが多いし，金銭もきわめて長期の返済を見越して貸与される。さらに顕著な事例として，いくつかの複合世帯では，すべての成人男性がそれぞれの世帯で調理した食事を持ち寄り，共食をおこなう光景がみられる。つまり複合世帯は，一般的互酬性が卓越する居住域（Sahlins 1972: 193）だといえる。ただし，互酬性の度合は，複合世帯により異なる。
3) この若者は男性であることが多く，そのためにヴェズ社会では夫方居住の傾向がある。ただしこの傾向は，居住規則と呼ぶほど厳格なものではない。
4) 統計的には，雨季にのみ有意差があった（Mann-Whitney's *U*-test. U=303.5, n_1=40, n_2=39, z=–4.67, p<0.001）。しかし，出漁時間を男女間で比較できれば，乾季にも有意差が見られたであろう。
5) とくに，女性の漁撈活動に関する季節差は，統計的に有意であった（Mann-Whitney's *U*-test. U=267.5, n_1=25, n_2=39, z=–3.03, p<0.005）。
6) 調査方法の節で述べたように，乾季における数量的調査の日数はそれぞれの家族につき7日間であり，雨季には14日間であった。そこで，比較を容易にするため，労働投入量と生産高は2週間分の値になるよう標準化した。

7) この労働力は，1例を除き，他村に住む家族Aの姻族が提供したものであった。
8) FMG（*Franc Malgache*）はマダガスカルの通貨で，1996年には10,000 FMGが2.1米ドルに相当した。
9) ここでは，調理した食事を分け合う単位としてグループを定義した。筆者自身は訪問者の数に含めなかったが，筆者のガイドとしてムルンベからやって来て漁師からナマコを買い付けていた者らは数に含めた。
10) 2003年の現地調査で得た情報によると，工業製品の釣り針が普及する前には大きな釣針を自作してサメを釣ることもあったという。
11) この霊は，マダガスカル標準語で *tromba*，ムルンベヴェズの方言で *doany* と呼ばれる。超自然的な理由によって生じたと思われる問題に直面したとき，人びとは，霊を呼び出して助言を与えてくれるよう霊媒に依頼する（Estrade 1985; Sharp 1993）。
12) マダガスカルにおける「禁忌」という語（標準マダガスカル語で *fady*, ヴェズ方言で *faly*）は，民俗遺伝学的な理由によって忌避される食物，性的関係を避けるべき異性の親族，規範からの逸脱，単なる無作法など，さまざまな意味を持っている（Ruud 1960）。
13) 3頭のサメの推定重量は，163 kg，84 kg，38 kgである。
14) 毎回の出漁に関して漁獲量を測定して統計的に分析すれば，漁獲効率には有意差がみられたはずである。この作業をおこなわなかったのは，漁獲されたフカヒレが混じりあい，どの漁でどのフカヒレを得たかがわからなくなったためである。
15) アンバシラヴァ村における主食作物の消費については，飯田（2001）を参照。
16) ヴェズによるナマコ採取が初めて報告されたのは，20世紀初頭にまでさかのぼる（Grandidier et Grandidier 1908: 377; Barbier 1908: 41）。これらの報告はトゥリアラ市付近での観察をもとにしているようだが，これに対してコクラン（Koechlin 1975: 43，57，114）は，ムルンベ地方でナマコ採取が始まったばかりのようすについて報告している。
17) 脱稿後，2003年3月に村を訪れたところ，2002年暮れに漁獲されたというトゥヴェを見ることができた。資源が回復傾向にあるのかもしれない。すでに乾燥していたので正確に同定できなかったが，*Stolephorus* 属の一種であるらしい。
18) マダガスカル全体の人口増加率は，1980年から1996年まで毎年2.8%であったと算定されている（Thompson 2000）。ヴェズ漁村での人口増加率はこの値より高いと推測される。
19) こうした忌避の原因となっているひとつの要因として，邪術へのおそれがあげられる。遠隔地で病気になった者は，治療のために帰郷したのち，邪術をかけられたという診断を受けることが多い（飯田 2002）。

文　献

Acheson, James M.

1981 Anthropology of Fishing. *Annual Review of Anthropology* 10: 275-316.

1989 Management of Common-Property Resources. In Stuart Plattner (ed.) *Economic Anthropology*, pp. 351-378. Stanford: Stanford University Press.

Astuti, Rita

1995a *People of the Sea: Identity and Descent among the Vezo of Madagascar*. Cambridge: Cambridge University Press.

1995b 'The Vezo Are Not a Kind of People': Identity, Difference, and 'Ethnicity' among a Fishing

People of Western Madagascar. *American Ethnologist*, 22 (3): 464-482.

Barbier, Le

1908 Les Pêches Maritimes dans la Province de Toliara. *Bulletin Economique de Madagascar* 1&2: 30-47.

Bauchot, Marie-Louise et Gabriella Bianchi

1984 *Guide des Poissons Commerciaux de Madagascar: Espèces Marins et d'Eaux Saumâtres. Rome*: Organisation des Nations Unies pour l'Alimentation et l'Agriculture (Fiches FAO d' Identification des Espèces pour les Besoins de la Pêches).

Berkes, Fikret (ed.)

1989 *Common Property Resources: Ecology and Community-Based Sustainable Development*. London: Belhaven Press.

Berkes, Fikret, Robin Mahon, Patrick McConney, Richard Pollnac, and Robert Pomeroy

2001 *Managing Small-Scale Fisheries: Alternative Directions and Methods*. Ottawa: International Development Research Centre.

Bunce, Leah, Philip Townsley, Robert S. Pomeroy and Richard Pollnac

2000 *Socioeconomic Manual for Coral Reef Management*. Townsville: Australian Institute of Marine Science.

Cordell, John (ed.)

1989 *A Sea of Small Boats*. Cambridge: Cultural Survival, Inc.

Estrade, Jean-Marie

1985 *Un culte de possession à Madagascar: Le tromba*. Paris: L'Harmattan.

Faublée, Marcelle et Jacques Faublée

1950 Pirogues et Navigation chez les Vezo du Sud-Ouest de Madagascar. *L'Anthropologie* 54: 432-454.

Grandidier, Alfred et Guillaume Grandidier

1908 *Ethnographie de Madagascar, Tome IV*. Paris: Imprimerie National.

Griffith, J. F. and R. Ranaivoson

1972 Madagascar. In J. F. Griffith (ed.) *Climates of Africa* (World Survey of Climatology 10), pp. 461-499. Amsterdam: Elsevier Publishing Company.

Hornell, James

1920 Les Pirogues à Balancier de Madagascar et de l'Afrique Orientale. *La Géographie* 34: 1-23.

飯田卓

2000 「インド洋のカヌー文化──マダガスカル沿岸漁民ヴェズの村から」尾本惠一・濱下武志・村井吉敬・家島彦一編『海のアジア 2 モンスーン文化圏』pp. 181-207, 東京：岩波書店。

2001 「マダガスカル南西部ヴェズにおける農家経済と漁家経済」『アフリカ研究』57: 37-54。

2002 「漁場境界のジレンマ──マダガスカル漁民社会におけるナマコ資源枯渇への対応と紛争回避」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海──水産資源管理の人類学』pp. 107-125, 京都：人文書院。

Jentoft, Svein

1989 Fisheries Co-Management: Delegating Government Responsibility to Fishermen's Organizations. *Marine policy* 13: 137-154.

Johannes, Robert E.

1978 Traditional Marine Conservation Methods in Oceania and Their Demise. *Annual Review of Ecology and Systematics* 9: 349-364.

Kishigami, Nobuhiro and James Savelle (eds.)
in print *Indigenous Use snd Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Series). Osaka: National Museum of Ethnology.

Koechlin, Bernard 1975a.
1975 *Les Vezo du Sud-Ouest de Madagascar: Contribution à l'Étude de l' Éco-Système de Semi-Nomades Marins*. Paris: Mouton.

Kottak, Conrad P. and Alberto C. C. Costa
1993 Ecological Awareness, Environmentalist Action, and International Conservation Strategy. *Human Organization* 52 (4), 335-343.

Marikandia, Mansaré
2001 The Vezo of the Fihereña Coast, Southwest Madagascar: Yesterday and Today. *Ethnohistory* 48 (1-2): 157-170.

McCay, Bonnie J. and James M. Acheson (eds.)
1987 *The Question of the Commons: The Culture and Ecology of Communal Resources*. Tucson: The University of Arizona Press.

Pichon, M.
1972 The Coral Reefs of Madagascar. In R. Battistini and G. Richard-Vindard (eds.) *Biogeography and Ecology in Madagascar*, pp. 367-410. Hague: Dr. W. Junk B. V. Publishers.

Pinkerton, Evelyn (ed.)
1989 *Co-operative Management of Local Fisheries: New Directions for Improved Management and Community Development*. Vancouver: University of British Colombia Press.

Poggie, John J. and Richard B. Pollnac
1991 *Small-Scale Fisheries Development: Sociocultural Perspectives*. Rhode Island: International Center for Marine Resource Development, University of Rhode Island.

Ruddle Kenneth and Tomoya Akimichi (eds.)
1984 *Maritime Institutions in the Western Pacific*. (Senri Ethnological Studies No.17) Osaka: National Museum of Ethnology.

Runge C. Ford
1992 Common Property and Collective Action in Economic Development. In Daniel W. Bromley et al (eds.) *Making the Commons Work*, pp. 17-39. San Francisco: Institute for Contemporary Studies.

Ruud, Jørgen
1960 *Taboo: A Study of Malagasy Customs and Beliefs*. Oslo: Oslo University Press.

Sahlins, Marshall
1972 *Stone Age Economics*. New York: Aldine de Gruyter.

Sharp, Lesley A.
1993 *The Possessed and the Dispossessed: Spirits, Identity, and Power in a Madagascar Migrant Town*. Berkeley: University of California Press.

Stern, Paul C., Thomas Dietz, Nives Dolšak, Elinor Ostrom and Susan Stonich
2002 Knowledte and Questions after 15 Years of Research. In E. Ostrom, et al (eds.) *The Drama of the Commons*, pp. 445-480. Washington, DC: National Research Council.

Tucker, Bram T.
2000 The Behavioral Ecology and Economics of Variation, Risk, and Diversification among Mikea Forager-Farmers of Madagascar. Unpublished PhD dissertation, University of North Carolina at

Chapel Hill.

Thompson, Virginia

2000 Physical and Social Geography. *Africa south of Sahara* 30: 684.

Twyman, Chasca

2000 Participatory Conservation? Community-Based Natural Resource Management in Botswana. *The Geographical Journal* 166 (4): 323-335.